

個人だとそんなに悪くないのに、集団だと今一つの日本、なぜ？

青山キャンパス 在宅看護学分野 塚本桂子

「日本」という国にしても、「日本人」にしても、多分、個々で見ると、そんなに悪い訳ではないと思うのだが、またしても日本という社会の遅れをまざまざと見せつけられた気がする講義内容だった。

まず、ADA（そもそも「Americans with Disabilities」としたこと自体が日本の法律とはスタンスが違うように思える）であるが、日本では本当に個人の「自立」（障害の有る無しに関わらず、広く一般においても）が尊重されているのであろうか。個々人自体も、己の「自立」について「それは権利である」と、認識しているだろうか。誰かに依存した決定となっていないだろうか。

今の日本では、ADAのような法律が制定できるだけの「市民」が育っていないように思う。いろいろなことが「お上から降ってくる」と思っていないか。欧米における民主主義は、市民が勝ち取って得たものであった。だが、日本の場合は、第二次世界大戦の敗戦により、戦勝国である（欧）米から「降ってきた」ものだった。それ故、「自分たちで勝ち取る」という意識も薄いのではないか。

そして、社会自体の成熟も遅れているのだと思う。本当は降ってくるものなど一つもないのだ。各々が当事者意識を持たないと、何も変わらないと思う。「誰かのこと」ではなく、「自分のこと」として思えないと、「（どうでも）いいんじゃない」ということになってしまう。

CILが「良いな」と感じたところは、運営や各種のサービスを障害者自らが中心となって行っているところである。日本はまだまだ「周囲が不都合を察知してサポートしてくれる」ところまで育っていない。残念ながら、当事者の方々が発信していかないと、様々な不便さ、不都合さが理解されない状況だと思う。（そもそも、そのような不便さが存在するということが自体も気にしていないことが多いように思う。）

日本人個々人は、世界の中でもかなり親切で周囲のことを気にする部類に入るのではないかと思う。だが、「社会という集団としての日本」で考えると、残念ながら、まだまだ発展途上の状態ではなかろうか。どうして日本は、個人だとそんなに悪くないのに、集団だと今一つなのだろう。今までの歴史や文化が複雑に絡み合っていて現状となっているのだろうが、もうそろそろ日本も世界に通用する「立派な」所謂「先進」国への仲間入りをしたいものである。それには少しずつの積み重ね、少しずつの変化をしていくしかないのだろうが、自分も当事者意識を持っていろいろな問題に声を上げていけるようになりたいと、改めて考えさせられる講義内容であった。

